

在籍校名
職・氏名

福岡県立直方特別支援学校
教諭 安陪 知

研 修 報 告 書

このたび、長期派遣研修員として、下記のとおり研修をしましたので報告いたします。

記

1 研修種別

D 福岡県教育センター研修員

2 主題研修について

研究主題 「肢体不自由と知的障がい併せ有するA児が、自らコミュニケーション手段を選択し、身近な出来事を伝えることができる自立活動
—見やすい、探しやすい補助教材の共同作成とその活用の指導を通して—」

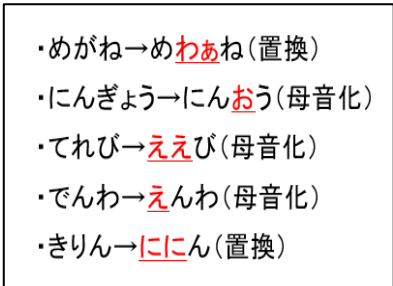
(1) 研究のねらい

ア 課題の背景

(7) 対象児童の実態から

本研究対象のA児は、肢体不自由と知的障がいを併せ有する小学部の児童である。右片麻痺があり不安定ではあるが独歩が可能で、机上学習に取り組むことができる。人と話すことが好きであり、教師や友達に対して家庭や学校で体験したことを3～4語文で伝えようとする姿が多く見られる。しかし、口腔の麻痺による発音の不明瞭さから、相手に聞き返されたり違う言葉で解釈されたりすることが多く、伝えたいことが伝わらずに悔しさやもどかしさを感じているのが現状である。

実態調査では、構音や見え方に関する二つの検査を実施した。構音検査では、発音の不明瞭さの背景として、右片麻痺による口腔の麻痺のため舌を動かさずに発話し、音が母音化したり置換したりすることが分かった(図1)。一方、フロスティック視知覚発達検査では、「Ⅱ図形と素地」で図形が三つ重なるものから指定された図形を、「Ⅳ空間における位置」で見本と異なる図形を見付けることができた。このことから、図や文字の形を正しく捉え複数の中から選び出すことが可能であることが分かった。見ることや読むこと



- ・めがね→めわぁね(置換)
- ・にんぎょう→にんおう(母音化)
- ・てれび→ええび(母音化)
- ・でんわ→えんわ(母音化)
- ・きりん→ににん(置換)

図1 A児の発音の状況

については、聞いた平仮名を平仮名表で見付け指さしたり、平仮名カードを読んだりすることができた。絵カードの仲間分け活動では、カテゴリーごとに絵を正しく仲間分けすることができた。

以上のことから、見ることや読むことに対する力の高まりが見られるA児に、発話だけでなく適切な補助教材を用いて、相手に確実に伝えることができるように導くことが重要であると考えた。そこで、A児にとっての補助教材を、平仮名表とタブレット型端末とした。平仮名表はA児が自らすぐに手元で示すことができ、平仮名表から特定の平仮名を探し出すことが可能で有効であると考えた。タブレット型端末については、A児の興味・関心がとても高い。また、学校においてタブレット型端末が一人1台配付され、コミュニケーションをサポートするアプリケーションを入れることで、伝えるための補助教材として高等部卒業まで日常的に継続して活用できる。さらに、絵等を分類したスライドを表示できるタブレット型端末を使うことにより「探しやすい」という点で効果があると考えた。

(イ) 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編から

特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編では、6 コミュニケーション (2) において脳性まひの幼児児童生徒の場合、「発話機能の改善を図るとともに、文字の使用や補助的手段の活用を検討して意思表出を促す」ことの大切さについて記載されている。また、2 心理的安定 (3) において、知的障がいのある幼児児童生徒の場合、自分の考えや要求が伝わる成功体験を積み重ねるとともに、その上でコミュニケーション手段の選択と活用に関することなどの指導をすることの大切さが述べられている。このことから、現在、発話で相手に伝える際、部分的に伝わらない言葉があるために相手に自分の思いや考えを伝えることが難しいA児にとって、補助教材を使って言葉を伝えることができるようになることは、今後、人間関係を築いていく上で意義深いものであると考えた。

イ 研究の目的

発音が不明瞭なA児が相手に身近な出来事を伝えることができるようになるために、自立活動の指導において、A児にとって使いやすい補助教材の共同作成と活用の指導の有効性を明らかにする。

(2) 研究の構想

ア 主題の説明

(7) 主題について

コミュニケーション手段とは、A児が相手に自分の経験や思いを伝えるための方法であり、本研究においては、「発話」、「平仮名表による語頭の指さし」、「タブレット型端末で示した絵の音声再生」の三つを指す。選択しとは、三つのコミュニケーション手段から一つ、又は複数を選ぶことである。身近な出来事を伝えることができるとは、A児が家庭や学校生活において、自ら体験した事柄をコミュニケーション手段を使って、相手が分かりやすいように声を出して話したり文字の指さしや音声再生で表したりすることができることである。

(イ) 副題について

見やすい、探しやすい補助教材とは、身近な出来事を伝えるために必要である文字をすぐに見付けることができる平仮名表や、カテゴリー分けした絵を示し音声再生ができるタブレット型端末のことである。これらは、A児の見え方の実態に配慮したものであり、A児にとって、使いやすいものである。共同作成とは、見え方等の把握、時間の計測による比較、見やすさ等を尋ねる問い、自己選択・自己決定の促し、即時作成等を行いながら、A児の実態に応じた適切な補助教材と一緒に作ることである。その活用の指導とは、A児がコミュニケーション手段を選択し、身近な出来事を相手に伝えることができるよう導いていくことである。具体的には、①伝える内容・方法を、単語から自分の伝えたい文章へ、②伝える相手を、授業者から関わりの少ない教師へ、一単位時間の中で段階的に仕組むことである。

A児の目指す姿を以下に示す。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">○ 使いやすい補助教材を教師と一緒に作るができる。【作る姿】○ コミュニケーション手段を選び体験した事柄を伝えることができる。【伝える姿】 |
|--|

イ 研究の内容

研究構想図を次頁図2に示す。本研究では【作る】と【伝える】の二つの力の高まりを通して自らコミュニケーション手段を選択し、身近な出来事を伝えることができる姿を目指す。これらの力を第I期、第II期の二つの段階に分け、共同作成と活用の指導を行いながら高めていく。

第I期では、伝える道具を選んで作る姿を目指す。この段階の【作る】では、見やすい、探しやすい補助教材を選ぶことをねらう。その際の共同作成として、A児の実態に応じて補助教材を作ることができるよう、見え方等の把握を行う。その後、実際に平仮名表やタブレット型端末を使い複数の見本から選択できるよう、時間の計測による比較や見やすさ等を尋ねる問い、自己選択や自己決定の促しを行う。次に【伝える】では、補助教材について知ることをねらう。その際の活用の指導として、補助教材の使い方が分かるよう、人や物の名前等、A児にとって身近な単語を授業者に補助教材で伝える活動を行う。

第Ⅱ期では、伝える道具を使って、伝える姿を目指す。この段階の【作る】では、タブレット型端末に伝えたい事柄の絵を増やすことをねらう。その際の共同作成として、発話が難しい単語の把握や追加する絵やその配置場所を決める自己選択と自己決定の促し、及び即時作成を行う。次に、【伝える】では、三つのコミュニケーション手段を組み合わせることをねらう。その際の活用の指導として、コミュニケーション手段を選択し伝えることができるように、一単位時間の中で伝える内容・方法、伝える相手について変化させていく。具体的には、①伝える内容・方法は、単語から自分の伝えたい文章へ②伝える相手は、授業者から教頭先生や他部門教員等、関わりが少ない教師へ変えていくことである。また、第Ⅰ期・Ⅱ期において活用の指導を行う際には、補助教材を使う時間の確保と有用性や楽しさを味わうことができるゲーム活動の設定を行う。

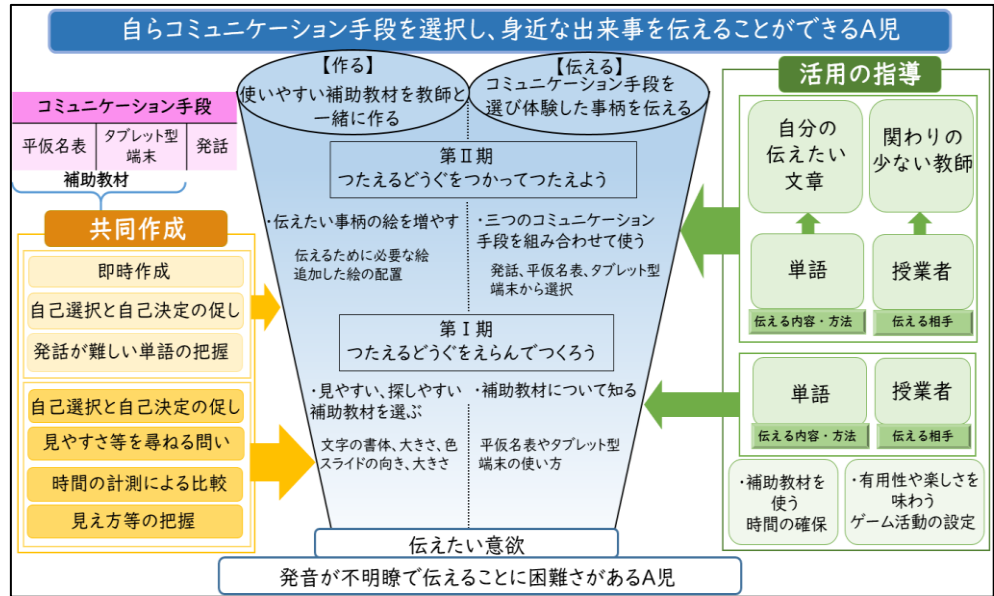


図2 研究構想図

発音が不明瞭で伝えることに困難さがあるA児

【作る】
使いやすい補助教材を教師と一緒に作る

【伝える】
コミュニケーション手段を選び体験した事柄を伝える

活用指導

自分の伝えたい文章
関わりが少ない教師

単語
授業者

伝える内容・方法
伝える相手

単語
授業者

伝える内容・方法
伝える相手

補助教材を使う時間の確保
有用性や楽しさを味わうゲーム活動の設定

発音不明瞭で伝えることに困難さがあるA児

(3) 研究の実際

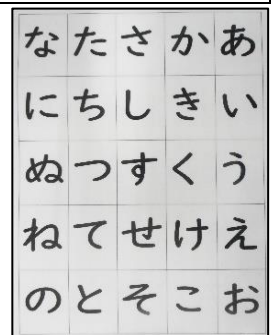
ア 第Ⅰ期（試行授業①～⑤）

(7) 試行授業単元指導計画（自立活動「つたえるどうぐをえらんでつくろう」全5時間）

配時	1	2	3	4	5
ねらい	自分の課題に気付き気持ちを伝えたり、伝えるための手段の道具があることを知ったりすることができる。実際に使う中で、書体、大きさ、色について、自分に合った平仮名表を選択することができる。実際に使う中で、カテゴリー分けの便利さに気付き、タブレット型端末のスライドの向きや大きさを選択することができる。平仮名表やタブレット型端末で、ゲームをしながら、平仮名や絵等を提示することができる。				
学習活動	・平仮名表の書体、大きさ、色を選ぶ [共同作成]	・タブレット型端末のスライドの向きや大きさを 選ぶ ・絵等の仲間分けをする [共同作成]	・見やすさや探しやすさを 確認する [共同作成]		
	・平仮名表の使い方を 知る ・人名や物の名前の伝言 ゲームをする [活用の指導：単語の 伝え方]	・タブレット型端末の 使い方を 知る ・まねっこゲーム、仲間 分けゲームをする [活用の指導：単語の 伝え方]	・二つの補助教材を 使う ・伝言ゲームをする [活用の指導：単語の 伝え方]		
	【伝える相手】 授業者				

(4) 作る（補助教材の共同作成）の指導の実際と考察

試行授業では、見やすい、探しやすい補助教材を選ぶことをねらいとした。試行授業①②では、平仮名表の文字の書体、大きさ、色の選択を行った。実際に複数の平仮名表を使い書体等の選択を促した。その結果、書体はUD文字、大きさは100pt（A4用紙片面にあ～な行・裏面には～わ行）、色は白地に黒の平仮名表を選んだ（資料1）。大きさや色の選択では、計測結果を知らせる前に一番早く文字を見付けた平仮名表をA児自ら選んだ（次頁表1、2）。また理由を尋ねると「濃い」、「見やすい」、「大きい」等と答えた。試行授業③では、タブレット型端末で使うアプリケーションソフト（DropTalk:HMDT社）のスライドの向きや大きさの選択を行った。絵の音声再生をした後、画面と同じ向きや大きさを示したスライドカードを見比べて選択を促した。その結果、横向き12マスのスライドを選び、理由を尋ねると「大きくて見やすいから」と答えた。試行授業④では、タブレット型端末で示される絵と同じ大き



資料1 選んだ平仮名表

さのカードの仲間分けを行い、見やすさや探しやすさを確認し仲間分けすることができた。

以上のことから、見え方等の把握をした上で複数の平仮名表やタブレット型端末のスライドの見本の中から自己選択・自己決定を促したり見やすさ等を尋ねる問いを行ったりすることで、A児が見やすさを自身で判断し見やすい、探しやすい補助教材を選ぶことができたと考える。

(7) 伝える（補助教材の活用）の指導の実際と考察

試行授業では、補助教材について知ることをねらいとした。試行授業①②では、平仮名表の使い方が分かるように、平仮名表を使い人名や物の名前の単語を伝えるゲームを行った。その際、絵とその名前の文字を示したカードを使い、平仮名を一音ずつ確認し指さすよう促した。その結果、文字を平仮名表から探し出し、指さして伝えることができるようになった。試行授業③④では、タブレット型端末の使い方が分かるように、まずタブレット型端末に入っている単語の絵を音声再生し、まねっこゲームを行った。その結果、「～先生」や「歌う」等を音声再生し、授業者が伝えられた通りに歌ったり踊ったりする姿を見て楽しみ、タブレット型端末で単語を伝えることができた。次に、絵をカード化したものを分類する仲間分けゲームを行った。その結果、「○○は、△△の部屋（カテゴリー）に入る」という意味が理解でき、仲間分けすることができた。実証授業⑤では、補助教材を使い定型文の単語を授業者に伝える伝言ゲームを行った。その結果、補助教材の選択に迷うこともあったが、絵や文字を探して伝えることができた。

以上のことから、初めて補助教材を使うA児にとって身近な単語を授業者に伝える活動を行うことで、補助教材の操作方法を学びながら、伝えるための補助教材について知ることができたと考える。

イ 第Ⅱ期（実証授業①～⑧）

(7) 実証授業単元指導計画（自立活動「つたえるどうぐをつかってつたえよう」全8時間）

配時	1	2	3	4	5	6	7	8
ねらい	平仮名表やタブレット型端末を操作し、使い方を思い出すことができる。	タブレット型端末のスライドに入っている絵や平仮名表で語頭の文字を提示することができる。発話や補助教材を選択して人に伝えることができる。伝えるために必要なスライドの絵等を考え、追加することができる。						
学習活動	①補助教材を使って絵探しゲームや平仮名探しゲームをする [活用の指導：単語の伝え方] →							
	②自分が伝えたい文章を、発話や補助教材を使って伝える練習をする [活用の指導：伝えたい文章の伝え方] →							
	③スライドに必要な絵等について考え、追加する [共同作成] →							
	④伝えたい文章を人に伝える [活用の指導：伝える相手] →							
	【伝える相手】 授業者・教頭先生 →							
				部門教員 A	他部門教員	部門教員 B	部門教員 C	指導主事

(4) 作る（補助教材の共同作成）の指導の実際と考察

実証授業では、タブレット型端末のスライドに伝えたい事柄の絵を増やすことをねらいとした。タブレット型端末のスライドは、実証授業①の段階で、人、場所、学校、動き、気持ち、勉強の6カテゴリーの単語の絵を各8枚（計48枚）入れたスライドを準備した（図3）。その際、A児が伝える際に使うであろう単語を授業者が選定した。実証授業①では、試行授業で共同作成した補助教材を提示し、見やすさや探しやすさ等を再度確認した。実証授業②～⑧では、平仮名探しゲームや伝える練習をした後にスライドに追加する絵の有無について尋ねた。その結果、発話が難しい単語は、「タブレットに入れてください」と授業者に伝えた。実証授業⑥～⑧では、A児が伝えたい「がんばる」や「チャック」等の絵を、即時作成した。その結果、相手に伝える際、絵を見付け音声再生することができた。また、追加した絵の配置場所について、「A児のおへや」というカテゴリーを作り入れることで、伝える際に音声再生す

表1 大きさの選択の計測結果

平仮名表の大きさ	文字を指さす時間
1. 大 (100pt)	70秒 ★
2. 中 (85pt)	140秒
3. 小 (60Pt)	249秒
人名の指さし時間 ★：A児が選択した平仮名表	

表2 色の選択の計測結果

平仮名表の色	文字を指さす時間
1. 黒地に黄色	135秒
2. 灰色地に赤	110秒
3. 黒地に白	100秒
4. 灰色地に白	120秒
5. 白地に赤	105秒
6. 白地に黒	90秒 ★
物の名前の指さし時間 ★：A児が選択した平仮名表	



図3 「うごき」のスライド

ることができた。その結果、実証授業⑧の段階では、計83枚の絵が入ったスライドを作成することができた（表3）。内訳は、発話が難しく追加した絵は13枚、即時作成した絵は4枚、発話に関係なく追加した絵は18枚であった。

以上のことから、発話が難しい単語の把握を行い、発話が難しい単語や伝えたい単語の絵の追加や配置場所を自己選択・自己決定及び即時作成することでA児にとって伝えたい事柄の絵が入った、見やすい、探しやすいスライドの共同作成ができたと考える。

(4) 伝える（補助教材の活用）の指導の実際と考察

実証授業では、三つのコミュニケーション手段を組み合わせることをねらいとした。実証授業②～⑧では、まず補助教材を使い単語を伝えることができるように、絵探しゲームや平仮名探しゲームを行った。継続して行った結果、タブレット型端末の絵探しゲームでは、授業者が口頭で伝えた単語の絵の音声再生までの時間が短くなった（図4）。このことから、タブレット型端末に入っている絵の把握ができたと考える。平仮名

表3 絵の数の推移

カテゴリー	実証①	実証⑧
人	8	12
場所	8	9
学校	8	8
動き	8	12
気持ち	8	9
勉強	8	11
A児のおへや	0	22
合計	48枚	83枚

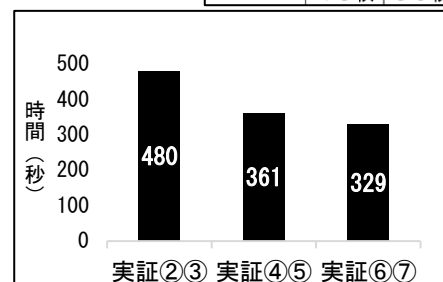


図4 48枚の絵の音声再生までの時間

探しでは、伝える際に必要な単語や発話が難しい単語を出題すると例えば『えんぴつ』の語頭の文字「え」を指さし、発話で「えんぴつ」と言いながら伝えることができた。次に、自分が伝えたい文章を発話や補助教材を使い、伝える練習を授業者と行った。その際、文章の伝え方が分かるように、授業者がコミュニケーション手段を使い、伝え方の演示を行った（図5）。その結果、授業者が伝えた内容を文章化して発話で答えることができた。その後、A児の伝えたい文章を聞き発話や補助教材を使い伝える練習を行った。その結果、単語をつなげて伝えることが分かり、連続してコミュニケーション手段を選択し文章を伝えることができた。最後に、発話で伝え、伝わらなかった言葉を補助教材を使い伝えたい文章を人に伝える活動を行った。その結果、実証授業③④では、練習時に授業者が「伝えたい単語がタブレット型端末になれば、平仮名表を選択」と言葉掛けを行ったことを思い出し、伝える場面では自分の伝えたい文章を伝えることができた。実証授業⑤では、伝えたい文章が8語文になり、相手に伝える際に混乱する姿が見られた。そのため、実証授業⑥以降、伝えたい文章が長文の際は、4語文程度に調整した。その結果、実証授業⑥～⑧では、発話のみで伝えることが難しかった3～4語文程度の文章を、コミュニケーション手段を選択し伝えることができた。

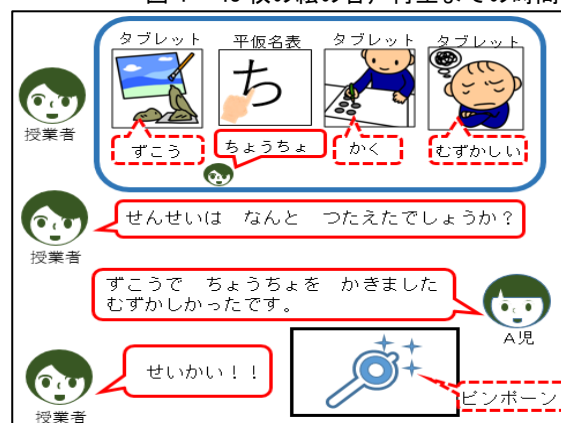


図5 コミュニケーション手段を使った演示場面

最後に、発話で伝え、伝わらなかった言葉を補助教材を使い伝えたい文章を人に伝える活動を行った。その結果、実証授業③④では、練習時に授業者が「伝えたい単語がタブレット型端末になれば、平仮名表を選択」と言葉掛けを行ったことを思い出し、伝える場面では自分の伝えたい文章を伝えることができた。実証授業⑤では、伝えたい文章が8語文になり、相手に伝える際に混乱する姿が見られた。そのため、実証授業⑥以降、伝えたい文章が長文の際は、4語文程度に調整した。その結果、実証授業⑥～⑧では、発話のみで伝えることが難しかった3～4語文程度の文章を、コミュニケーション手段を選択し伝えることができた。

伝える相手については、A児に選択を促すと、教頭先生には毎時間伝え、関わりが少ない教師の場合は自ら職員室等に行き、伝えたい先生を探す姿が見られた。また、伝わった際は笑顔で「ピンポン」と音の鳴る玩具で音を鳴らし、伝わる楽しさを感じながら伝えることができた。

以上のことから、伝える内容・方法を単語とし、補助教材を使って単語を伝える指導を行ったことで、平仮名表で語頭を指さしたり、タブレット型端末の絵を把握し即座に音声再生したりして単語を伝えることが定着した。その後、伝える内容・方法を自分の伝えたい文章とし、実際に伝え方の演示や文章の調整をしながら文章を伝える指導を行ったことで、コミュニケーション手段を連続して選択し相手に伝えることができた。また、伝える相手を授業者から関わりが少ない教師に変化させることで、伝える相手が広がるとともに、誰にでもコミュニケーション手段を選択して伝えることができたという成功体験を得ることができたと考える。このことから、一単位時間の中で伝える内容・方法、及び伝える相手を変化させることで、A児は自らコミュニケーション手段を選択し、自分の伝えたい文章を伝えることができたと考える。

(4) 全体考察

A児は、伝えたい話がある時、まず発話し、それが相手に伝わらない際にタブレット型端末、そして平仮名表を使い伝えるようになった。図6は、教頭先生に伝わった単語数の割合を、発話のみの場合とコミュニケーション手段を使用した場合とで比較したものである。このグラフから、A児が3～4語程度の身近な出来事を、コミュニケーション手段を使うことで、相手に確実に伝えることができたことが分かる。また図7より関わりが少ない教師に対しても発話で伝えることが難しい際に、自ら伝えたい身近な出来事に応じてコミュニケーション手段を選択し相手に伝えることができたことが分かる。さらに、伝えたい単語の即時作成を頼んだり、練習していない単語を伝える際に付け加えたりして伝える姿も見られるようになったことが示されている。

日常生活においては、学校において感想発表の際、自らコミュニケーション手段を選択し、自分の気持ち等を教師や友達に伝える姿が見られるようになった。また、

「補助教材があったほうがいい、（発話で）伝えることが難しいから」とA児の発言も聞かれた。これは、共同作成した補助教材を使うことで相手に伝わるのが分かり、それを使い自分の思いを伝えたいという気持ちの高まりであると考えられる。

(5) 研究の成果と今後の課題

ア 研究の成果

○ A児にとって見やすい、探しやすい補助教材の共同作成と、その補助教材を使って相手に伝える活用の指導によって、A児は自らコミュニケーション手段を選択し身近な出来事を伝えることができるようになった。

- ・ 共同作成の面では、A児の見え方等の把握、見やすさ等を尋ねる問い、自己選択・自己決定の促し、伝えるための即時作成を行う支援が有効である。
- ・ 活用の指導においては、一単位時間の中で補助教材を含むコミュニケーション手段を用いて伝える内容・方法を、単語から自分の伝えたい文章へ、伝える相手を、授業者から関わりが少ない教師へ段階的に仕組むことが大切である。

イ 今後の課題

○ A児にとって更に使いやすい補助教材となるよう、絵の追加等の自己選択・自己決定を進めるとともに、友達との話し合い活動における活用の手立てを検討する。

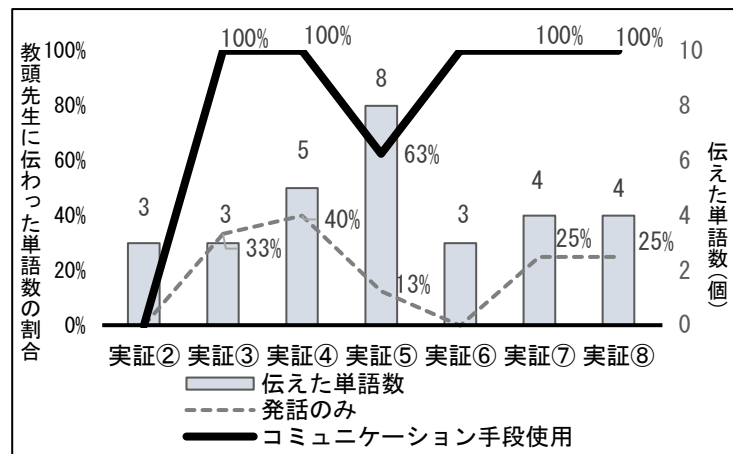


図6 伝えた単語数と教頭先生に伝わった単語数の割合

授業	伝えた相手	伝えた身近な出来事 (発: 発話のみ、コ: コミュニケーション手段)	伝わった単語数
実証②	教頭先生	発: きゅうしょくで からあげを たべました	0
		コ: きゅうしょくで からあげを たべました	0
実証⑤	他部門教員	発: おんがくで ぞうさんを おどりました	2
		コ: おんがくで ぞうさんを おどりました	3
実証⑥	部門教員	発: あさ きがえで ちゃっくが むずかしいです	1
		コ: あさ きがえで ちゃっくが むずかしいです がんばります	5
実証⑧	指導主事	発: あした うんどうかいで おかあさんが みにきます	1
		コ: あした うんどうかいで おかあさんが あかちゃんと みにきます わたし おどります	7

図7 伝えた相手と内容及び選択したコミュニケーション手段

_____ : 発話
 _____ : 平仮名表の語頭の指し示し+発話
 □ : タブレット型端末の音声再生
 _____ : 即時作成した単語
 ■ : 伝える際、A児が付け加えた単語

<使用ソフトウェア>



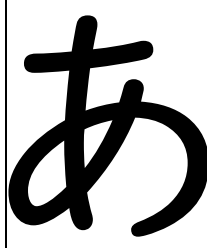

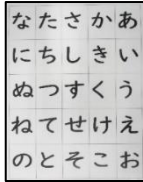
- ・ 「DropTalk 2006-2021 version6.0.9」(2006) HMDT Co., Ltd.

【添付資料】

○ 補助教材を選択する際に教師が提示した見本とA児が選択した補助教材

《平仮名表》

《タブレット型端末のスライド》

選択順	提示した平仮名表の詳細 (<input type="checkbox"/> はA児が選択)	選択した もの	選択順	提示したスライドの詳細 (<input type="checkbox"/> はA児が選択)	選択した スライド
書 体 ↓	①HGP教科書体 教科書で使われている文字 ②UDデジタル教科書体 NK-R 可読性や視認性、判読性が 高くデザインされた文字		方 向 ↓	①縦方向で使用した時 のスライド ②横方向で使用した時 のスライド	
	①60 p t A 4用紙片面 1枚に 50音 ②85 p t A 4用紙片面にあ～は行・ 裏面にま～わ行 ③100 p t A 4用紙片面にあ～な行・ 裏面には～わ行	 【実際の大きさ】		①3×3マスで計9枚 の絵が入る ②3×4マスで計12枚 の絵が入る ③4×4マスで計16枚 の絵が入る	
↓ 大 き さ ↓	①白地に黒 ②黒地に黄色 ③灰色地に赤 ④白地に赤 ⑤地に白 ⑥色地に白				

○ 共同作成したタブレット型端末のスライド

(: 教師があらかじめ用意した単語、 : 追加した単語、 : 即時作成した単語)

【ひと】



Aくん	Bくん	Cくん	Dせんせい
Eせんせい	Fせんせい	あべせんせい	あかちゃん
おとうさん	おかあさん	おとうと	わたし

【ばしょ】



ほんばーがーやさん	しょうびんぐもーる	ようふくやさん	こんびに
おすしやさん	ゆうびんきょく	がっこう	いえ
こうえん			

【がっこう】



しょうかくしつ	ほけんしつ	なかにわ	げんかん
げたばこ	うんどうじょう	ほーる	きょうしつ

【うごき】



うたう	よむ	かく	たべる
はしる	のむ	みる	なく
あそぶ	おどる	きく	きる

【きもち】



たのしい	はずかしい	おどろく	かなしい
かわいい	おこる	うれしい	むずかしい
がんばる			

【べんきょう】



こくご	さんすう	たいいく	ずこう
おんがく	きゆうしよく	あさのかい	せいかつ
がっかつ	じかつ	しんたいそくてい	

【A児のおへや1】



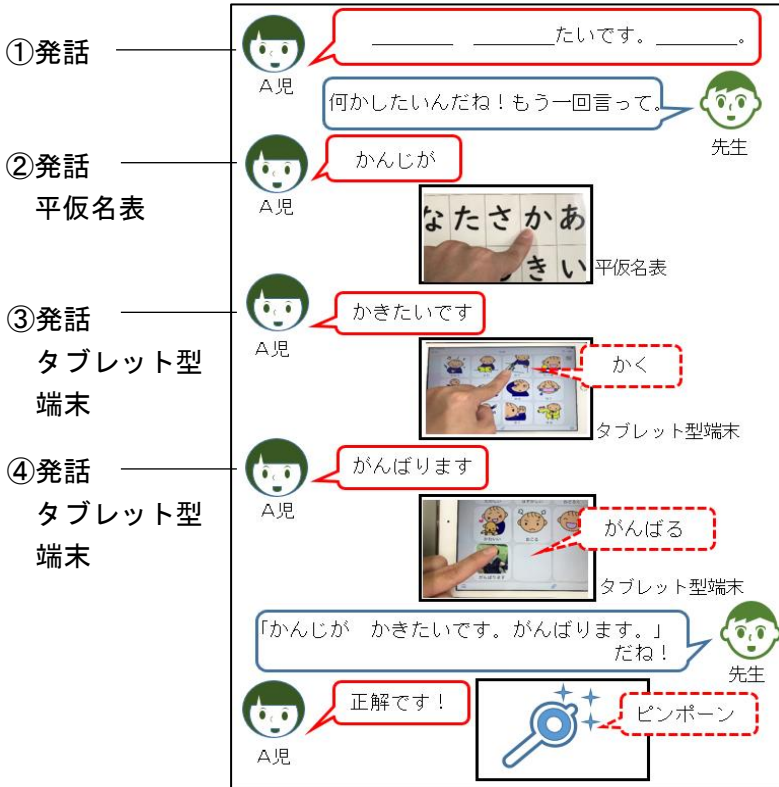
からあげ	はさみ	にんじゃ	らーめん
けしごむ	うま	はなび	おにごっこ
ふうせん	れいぞうこ	てれび	ねこ

【A児のおへや2】



えんぴつ	のり	ちょうちょ	みかん
すとりー	はんどべる	Gせんせい	めだまやき
ちゃつく			はんぱーぐ

○ A児がコミュニケーション手段を選択し伝える際のフローチャートとその場面



【コミュニケーション手段を選択し伝える際のフローチャート】



【実証授業⑥：教頭先生に伝える場面】



【実証授業⑧：指導主事に伝える場面】
※リモートにて実施